

県立大経済学部の清水葉子准教授(金融論)のゼミ生が、今年2月の大雪に伴う福井市の財政難問題に理解を深めようと、福井新聞社の担当記者を招いた特別講義を受講した。学生たちは普段聞くことができない記者の生の声に興味津々の様子で、具体的事例から自治体の財政問題や災害対応を学んだ。



「活字離れ」が指摘される中、新聞を活用した深い学びを提供しようと、清水准教授らと同社が連携して今春から始めた「XTRA(エクストラ)」活動の一環。今回、同准教授が学生に「最近気になる記事」を聞いたところ、福井市の財政問題が最多だったため、市政担当の川上桂記者(37)を講師に招いた。ゼミは3年生を中心に13人が参加。学生たちは、財政難

福井市財政難 記者へ質問



川上記者(左)から福井市の財政難問題について話を聞く学生たち＝永平寺町の県立大永平寺キャンパス

幹線や国体の準備、ハピリン整備など大型事業が相次いだことで十分に財調基金を積み増せなかったことを説明。取材時のエピソードを交えながら、市職員の高い給与水準や中核市移行を目指す市と県の関係についても分かりやすく解説し、学生の興味を引いていた。清水准教授は「川上記者の個人的な意見が聞けて、学生たちも今回の問題がイメージしやすかったと思う。地元新聞社との『距離の近さ』を生かした試みを通し、新聞に興味を持つ学生が増えてほしい」と期待を込めた。(宇野和宏)

県立大・清水ゼミ

生の声に興味津々

に関する記事に目を通しながら「お金が余っている他の市町や県が福井市を助けることはできないのか」「公共事業見直して事業者から苦情は出していないのか」「財政調整基金に関して財務省は『ためこんでいける』と問題視し、総務省は『備えが必要』と反発している。川上記者はどちらの立場で今回の問題を見ているか」など、矢継ぎ早に質問や意見を出していた。川上記者は、福井市が北陸新